

第一次大戦前ドイツ玩具産業の発展と 世界市場における位置

森 良 次

はじめに

工場制工業化のすすむ19世紀のドイツでは、中小の産業経営が小農制や手工業制度と結びついて存続し、産業部門によっては発展の傾向すら示したことが知られている。こうした中小産業経営の動態をめぐり、ドイツの政治社会史研究は手工業者や小売中間層がナチズム運動を支持した事実注目し、ファシズムの社会的基盤の解明という関心から第二帝政期のドイツで社会保護主義的な中間層政策が手工業者に対し国家保護を与えたことを明らかにしている¹。経済史研究の分野では、工場制工業化が進展するなかで、これと競争関係にたつ手工業者の衰退が論じられる一方、これとは逆に手工業部門の近代化・資本主義化傾向が検出され、あるいは工場制工業との補完関係にもとづく手工業部門の存立・発展（例えば、取付・修繕、販売、部品供給など新たな生産・サービス部門の発展とこれへの手工業者・小営業者の編入、素材生産は工場制工業が、加工・組立工程は中小経営が担うという工程間分業、工場制工業では効率的に生産しえないニッチ市場での手工業の発展など）が議論されてきた²。

以上の諸研究は、営業中間層の動態を規定している要因とその結果について、立場を異にしているものの、中間層問題をドイツの権威主義的な政治構造や工業化という国内問題の帰結と捉える点では共通している。

しかし、19世紀後半から戦間期にかけての時代は、第一次グローバル化の時代とも称されるように、世界貿易の急速な成長がみられヨーロッパ内でも国際分業が深化した時代であった³。中小の産業経営が担う加工・組立産業のなかにも、世界貿易の成長の波にのり輸出産業として発展を遂げる産業は数多く存在しており、中小産業経営の動態は国内の政治経済状況のみならず、世界市場とそこにおける国際的な競争関係に規定される面をもっていた。

本稿は、工場制化の度合いが低く、家内工業や手工業を含む中小の産業経営が支配的な産業を労働集約型産業と捉え、その一事例として玩具産業を取り上げ、第一次大戦前の同産業の発展とその特徴を素描するとともに、ドイツ玩具産業が世界市場においてどのような位置を占めていた

¹ H・A・ヴィンクラー（後藤俊明ほか訳）『ドイツ中間層の政治社会史1871～1990年』同文館出版、1994年。

² 工業化過程における手工業の存立可能性については、ビューヒャー（Bücher, K.）をはじめドイツ社会政策学会を舞台に活躍した同時代人による多数の研究が存在し、全体として手工業衰退論が唱えられてきた。戦後、フィッシャー（Fischer, W.）らにより工業化過程に適応しえた手工業者の実態解明がすすみ、手工業衰退論は修正を加えられることになった（Fischer, W., *Wirtschaft und Gesellschaft im Zeitalter der Industrialisierung. Aufsätze, Studien, Vorträge*, Göttingen, 1972.）。近年は、手工業者を一枚岩の均質な社会層とみるのではなく、その多様性、不断の分解を伴う動態変化の側面に注目した研究があらわれている（例えば、Sedatis, H., *Liberalismus und Handwerk in Südwestdeutschland. Wirtschafts- und Gesellschaftskonzeptionen des Liberalismus und die Krise des Handwerks im 19. Jahrhundert*, Stuttgart, 1979；日本では、柳澤治『ナチス・ドイツと中間層 全体主義の社会的基盤』日本経済評論社、2017年）。

³ ジェフリー・ジョーンズ（安室憲一、梅野巨利訳）『国際経営講義 多国籍企業とグローバル資本主義』有斐閣、2007年。

のか確認することを課題としている⁴。ドイツ玩具産業は世界貿易の拡大とともに19世紀末以降急成長し、第一次大戦前には世界最大の玩具生産・輸出実績を誇った。それは輸出指向性が強いドイツ労働集約型産業の一つの典型であった。

もとより各産業・生産工程には固有の技術体系があり、それぞれの技術特性が機械化や工場制工業化の速度にも影響を及ぼすことになる。産業革命以降、綿紡績業や鉄工業などの素材生産部門で工場制工業化がすすむ一方、加工・組立部門では機械化は技術的に困難で、19世紀を通じて手工的技術が労働過程で中心的位置を占め続けた⁵。中小経営主体の分散型生産組織を特徴とするドイツ玩具産業でも19世紀末以降に工場制工業化が本格化したという事実は、このような生産工程間の技術的不均等発展と無関係ではない。

だが、世界の主要な玩具生産国をみると、イギリス、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）では玩具産業の経営規模はドイツに比べてはるかに大きく、逆に日本の玩具産業の中小企業性は際立っている⁶。ドイツ玩具産業は国際比較上、中位の産業集中度を示していた。

このような事実は、同一産業内でも国際競争関係のなかで資本集約型の工場制工業化を推し進める国・地域もあれば、ドイツのように労働集約型の産業発展を遂げる国もあり、中小産業経営の動態が技術的特性によってのみ説明されるものでないことを示している。本稿が中小の産業経営が支配的な諸産業を労働集約型産業と捉えるのは、ドイツにおける中小経営を主体とした産業発展の意義を国際比較産業史のなかに位置づけ把握したいと考えるからにほかならない。

以上の関心を近年のドイツ玩具産業史研究の成果を踏まえて敷衍するならば、本稿の特徴は玩具産業の動態をドイツ国内市場よりも世界市場との関連を重視して把握する点にあるといえよう。ハムリン (Hamlin, D.)、ジャナウエイ (Ganaway, B.)、ホフマン (Hoffmann, H.) らの研究は、いずれも帝政期のドイツで花開いたヨーロッパ的・ブルジョア的生活・消費様式を描き出し、ブルジョア家族における家庭教育熱の高まりと教育手段として位置づけられた玩具に対する需要増加がドイツ玩具産業の市場基盤を形成したことを強調している⁷。歴史や文化に拘束されて国・地域ごとに独自の特性を備える消費様式が、内部市場を通じて産業の誕生や発展の方向性に影響を及ぼすとの理解は重要である。しかし、ドイツ玩具産業は成立の最初期から強い輸出指向性を持ち、第一次大戦前から戦間期にかけてドイツは世界最大の玩具輸出国であり続けた。ドイツ玩具産業の動態を理解するうえで、世界市場とそこにおける国際的競争関係を無視すること

⁴ ドイツ玩具産業の動態を国際的競争関係のなかに位置づけ、労働集約型の産業発展として捉える本稿の視点は、谷本雅之（東京大学大学院経済学研究科）を主報告者とする学会報告、Msayuki TANIMOTO and Ryoji MORI, "Labour-intensive Industrialization in Global Competition : International Rivalry in the Toy Business from the 19th to 20th Centuries" in European Business History Association World Congress on Business History in Bergen on August 26-28, 2016, にもとづく。

⁵ 柳澤治『資本主義史の連続と断絶 西欧的發展とドイツ』日本経済評論社、2006年、第1章。

⁶ 日本の玩具産業が都市中小工業を担い手とする分散型生産組織を發展させ、これに立脚して戦間期の世界市場で強い競争力をもった点については、谷本雅之「戦間期日本の中小工業と国際市場－玩具輸出を事例として－」『大阪大学経済学』63巻1号、2013年；同「分散型生産組織の“新展開”－戦間期日本の玩具工業」(岡崎哲二編『生産組織の経済史』東京大学出版会、2005年、所収)、を参照されたい。

⁷ Hamlin, D., *Work and Play. The Production and Consumption of Toy in Germany, 1870-1914*, The University of Michigan, 2007; Ganaway, B., *Toys, Consumption, and Middle-class Childhood in Imperial Germany, 1871-1918*, Peter Lang AG, Bern, 2009; Hoffmann, H., *Erziehung zur Moderne. Ein Branchenportrait der deutschen Spielwarenindustrie in der entstehenden Massenkongsumgesellschaft (Dissertation)*, Eberhard-Karls-Universität Tübingen, 2000.

はできない。

本稿は、以上のような問題関心にもとづき、差し当たりドイツ玩具産業の成立と発展をエルツ山地の木製玩具産業を中心に素描し、あわせてその世界市場における位置を確認しようとするものである。

1. ドイツ玩具産業の成立

(1) 玩具生産の母国

ヨーロッパにおいて、玩具は元来、子どもむけの遊び道具ではなく、美術品などとならぶ大人の収集趣味の対象物であった。それは高価な工芸品としての性格を備えており、ゆえに玩具は主な消費地である宮廷都市の手工業者によりつくられるものであった。

ドイツでは、帝国直属都市ニュルンベルク (Nürnberg) が15世紀以来玩具生産の本場として知られており、ドイツ各都市の宮廷需要にこたえてドールハウス (Puppenhaus) や飾り棚など豪華で精巧な高質玩具がつくられていた。

ニュルンベルクは、ヨーロッパを南北に貫く通商路上の要地にあり、中世ヨーロッパの国際商業の中心地、ベネツィアから輸入された東方物産を西ヨーロッパ各地にもたらすことで、15世紀にはドイツ最有力の商業都市の一つとなった。またこれと軌を一にして遠隔地むけの鉄・金属加工業が興隆し、「ニュルンベルク玩具」(Nürnberger Tand) の生産も活発化した⁸。

ニュルンベルクでは、人形師 (Dockenmacher) の他、様々な手工業者が玩具生産に携わり、18世紀にはろくろ細工工が象牙細工の玩具、からくり人形 (Figur)、木製玩具などを生産した。また指物工や金属細工工 (Weissmacher) はドールハウス、ドールキッチン (Puppenküche)、人形の家具などを生産し、画工 (Wissmutmaler) は整理棚や箱など木製の玩具に蒼鉛顔料を彩色した。その他、石膏細工工 (Alabasterer) は石膏の人形を、蠟細工工 (Wachspossierer) は蠟人形 (Wachsfigur) を生産し、ガラス工 (Glasbläser) や鋳物工も玩具生産に従事した⁹。

ニュルンベルクがヨーロッパの主要な玩具生産・集散地となった背景には、同市と木材加工業の伝統をもつテューリンゲン (Thüringen) のマイニンゲン・オーバーラント (Meininger Oberland) やザクセン (Sachsen) のエルツ山地 (Erzgebirge) との結びつきがある。他のヨーロッパ玩具生産地と同じくニュルンベルクでも、玩具生産はツunft規制のもとにあり、様々な職種の手工業者からなる厳格な分業体制がとられていた。そのため需要の増加に応じて生産を拡大することには制約があり、これを嫌ったニュルンベルク商人はツunft規制から解放された地に新たな玩具生産の場を求めることになる。

後にニュルンベルクとともにドイツ玩具産業の主要産地となるマイニンゲン・オーバーラントでは、豊富な木材資源を利用した木工品の生産が山村住民の冬場の副業として営まれており、また同地はニュルンベルクとドレスデン (Dresden) を結ぶ軍路・通商路上に位置していたことから、ニュルンベルク商人との接触を通じて、16世紀に木彫りやろくろ細工の素朴な木製玩具の生産がはじまった。

他方、エルツ山地では、12世紀以来、銀をはじめとする鉱山の開発がすすめられ、15、16世紀に最盛期をむかえる。しかし30年戦争後は鉱山業も衰退し、18世紀に入るとこれにかわる新た

⁸ ヨーゼフ・クーリッシュェル (諸田實他訳) 『ヨーロッパ近世経済史』東洋経済新報社、1983年、377-395頁。

⁹ Rosenhaupt, K., *Die nürnberg-fürther Metallspielwarenindustrie in geschichtlicher und sozialpolitischer Beleuchtung*, Stuttgart, 1907, S. 22-28, を参照。

な就業機会として、木製玩具生産が鉾山夫などの間で普及した。エルツ山地でもニュルンベルク商人が玩具の販売を主導し、エルツ山地の玩具をマイニンゲン・オーバーラントの玩具とともに「ニュルンベルクもの」(Nürnberger Waren)として販売することで、当地の木製玩具生産は18世紀末以降本格化した¹⁰。

その結果、ニュルンベルクものの玩具は製品種類の豊富さと廉価さで評判を呼び、ニュルンベルクはヨーロッパの一大玩具生産・集散地となった。他のヨーロッパ諸都市、例えばパリでは象牙細工や指物工、金銀細工などにより意匠を凝らした豪華な玩具がつくられていた時代に¹¹、ニュルンベルクは豊富な木材資源と安価な山村労働力を基礎に発展した素朴な民芸玩具により需要を拡大し、イギリス、オランダ、スペイン、ポルトガルなどヨーロッパ各国とその植民地（アメリカなど）に玩具を輸出した¹²。



地図

18・19世紀のドイツ玩具生産地と商業路

(Bachmann, M., Holzspielzeug aus dem Erzgebirge, Dresden, 1994, S. 38, より作成)

- ▲ 玩具生産地
- ▨ 玩具産地
- 玩具見本市開催都市
- 玩具商業路
- 重要な玩具商業路
- オーストリア国境 (1815年)

¹⁰ Hoffmann, a. a. O., S. 26-29, の他、ゾネベルク (Sonneberg) を中心とするマイニンゲン・オーバーラントの玩具産業史については、Rausch, E., *Die Sonneberger Spielwaren-Industrie und die verwandten Industrien der Griffel- und Glasfabrikation unter besonderer Berücksichtigung der Verhältnisse in der Hausindustrie*, Berlin, 1901, S. 18-23, を、エルツ山地の玩具産業史については、Westenberger, B. E., *Die Holzspielwarenindustrie im sächsischen Erzgebirge unter besonderer Berücksichtigung der Hausindustrie*, Leipzig, 1911, S. 22-30, を参照。

¹¹ フランスの玩具・玩具産業の歴史を素描した、フランソワ・テメル (松村恵理訳) 『おもちゃの歴史』白水社、1998年、第1章を参照。

¹² Rosenhaupt, a. a. O., S. 29-31.

(2) 玩具産業の成立

このようにドイツは玩具生産の母国として長い歴史をもつが、玩具生産が他の関連諸産業から独立した一つの産業となり、部分的に工場制化を伴いながら発展するのは19世紀後半以降のことであり、玩具産業が社会的な認知を得るのは19世紀末を待たねばならない。

19世紀に入ると、ニュルンベルクでは玩具生産を主業とする「玩具生産者」(Spielwarenmacher)という非手工業職種が誕生し、錫の人形や木彫りの玩具、それに機械式からくり玩具の生産者の一部がこれに属することとなった。しかし、その増加は緩慢で、19世紀半ばになってもなお生産者の大多数は、たとえ玩具生産が主業となった場合でも、鍛冶工 (Rotschmiede)、ブリキ工、金属細工工 (Gürtler)、錫鋳物工、指物工、ろくろ細工工などの手工業職にとどまった。また実際の生産においても、例えば18世紀末から19世紀にかけて人気を博した人形部屋 (Puppenstube)をつくるために、指物工、錫鋳物工、仕立工などの手工業者がそれぞれの生産領域にもとづいて分業し、玩具を生産した¹³。

こうした事実は、玩具生産に携わる生産者が19世紀半ばにおいても手工業者という自己意識を保持し、また客観的にも手工業経営内で玩具生産が主業の地位を確立するに至っていなかったことを示すものである。非ツunft業種として玩具生産が普及したマイニンゲン・オーバーラントやエルツ山地では、ニュルンベルクよりもはやくに玩具生産の主業化がすすんだと考えられるが¹⁴、それでも後述するように、主業化の条件となる玩具生産に固有の季節労働的性格が大幅に後退するのは仲買商の在庫むけの生産や工場制化がはじまる1860/70年代のことであった。玩具の世界に安価な民芸玩具がもたらされたとはいえ、その需要はなお木工品や金属製品の生産者が玩具生産を主業とするほどに大きくはなく、ニュルンベルクの高質玩具生産の伝統は当地の手工業制度のもと保持された。

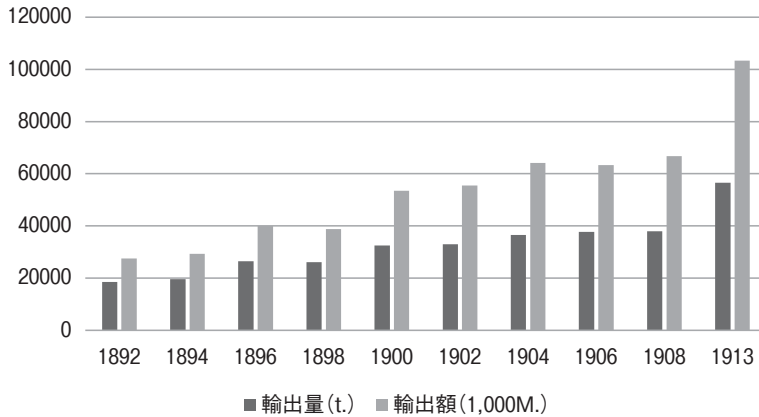
しかし、19世紀後半から玩具生産を主業とする生産者が徐々に増加し、1880年代以降はニュルンベルクを中心に本格的な工場制化を伴いながら、玩具生産は急速に発展する。その背景には、需要側の要因、すなわち、子どもを「小さな大人」としてではなく、家族や学校による保護と養育が必要な存在とみなす子ども観がブルジョア家族のあいだで一般化し、玩具が子どもの遊びや教育の手段となったこと¹⁵、しかもそうした子ども観の変化はブルジョアジーのみならず労働者家族のなかにも浸透し、19世紀末以降低価格品を中心に玩具需要がドイツを含め世界的に拡大したことなどがあった。それは玩具輸出の急速な拡大となってあらわれ、なかでもイギリス、アメリカむけの輸出がドイツ玩具産業の成立と発展を促した。

(第1図)は、ドイツの玩具輸出の推移を示している。同図から輸出は第一次大戦前の1888-1913年にほぼ一貫して増加し、金額で3.7倍、物価変動の影響を排除しうる輸出量でみた場合でも3.1倍の伸びを示していることが確認できる。そのなかで第一次大戦前はアメリカむけが、戦

¹³ Ebenda, S. 38-41.

¹⁴ ザクセンでは、エルツ山地の玩具産業の窮状に政府の特別な関心がむけられ、1870年に「玩具産業発展のための全体委員会」(Gesamtkommission für Hebung der Spielwarenindustrie)が設立された。同委員会は、玩具生産者の生産性を引き上げるべく、玩具産業の中心地ザイフェン (Seiffen) とグリーンハイニヘン (Grünhainichen) に営業協会と専門学校を設置 (ザイフェンについては、既存の「ザクセン王立玩具専門学校」(Staatliche Fachschule für Spielzeug)を改組)し、また巡回教師を雇用して各集落に派遣するなどした。エルツ山地の玩具産業に特段の政策関心がむけられ、積極的な振興策が講じられたという事実は、住民の多くが玩具生産を頼りに生活をし、またそのことを政府も認知していたことを示すものといえよう。同委員会については、Westenberger, a. a. O., S. 121-122, を参照。

(第1図) ドイツの玩具輸出



(出展) *Statistik des Deutschen Reichs*, Bd. 74, 80, 92, 123, 136, 153, 166, 181, 196, 310 T.2, より作成。

後はイギリスむけが輸出全体の3割以上を占め、輸出の拡大を牽引した。その結果、アメリカの玩具輸入(額)全体のなかでドイツ製品の占める割合は85.0%、人形に限れば98.6%に達した(1913年)。また世界の玩具輸出(額)のなかでドイツの輸出は71~76%を占め(1913年)、他の主要な玩具生産国(第1次大戦前)であるアメリカ、フランスの玩具輸出を圧倒した¹⁶。

加えて、世界の玩具輸出国の輸出先別の市場占有率を(第1表)によりみると、ドイツ以外の玩具輸出国は輸出先が地理的に偏在(例えば、イギリスはオーストラリアおよび南アフリカ市場で、アメリカはカナダ市場でのみ比較的高い市場占有率を確保)しているのに対して、ドイツは、日本が輸出の過半を占める中国を除き、全ての輸出先で高い市場占有率を示しており、所得の高低や文化的差異にかかわらず、世界の主要市場で高い国際競争力を有していた¹⁷。こうした旺盛な輸出活動の結果、玩具生産額でも、ドイツは世界の玩具生産の過半を占め、それに次ぐアメリカ、フランスの玩具産業をおおきく引き離していた((第2表)参照)。

¹⁵ フィリップ・アリエス(杉山光信、杉山恵美子訳)『「子供」の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1980年、第1部、第2、4章: Hamlin, ob. cit., p. 21-28; Ganaway, ob. cit., p. 40-64.

これらの研究によれば、子どもに対する教育的配慮の必要性は、17世紀以降、ヨーロッパのブルジョア家族のあいだで認められるようになり、その後は「家族愛」の観念と結びつき、子どもは親の監督のもと自律的な個人、善き市民として育てあげるべきとの考え方が支配的となった。18世紀末以降、ブルジョア家庭では、子どもの遊び場が「無秩序な路上」から母親の監視下にある遊び部屋(子ども部屋)へと移され、教育的意義を付与された子どもむけ玩具に対する需要が本格的にうみだされることとなった。

¹⁶ Ausschuß zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, *Die Deutsche Spielwarenindustrie*, Berlin, 1930, S. 175 u. 300.

なお、第一次大戦後のドイツの玩具輸出は、インフレの影響により一時的に戦前の水準を回復するものの減少に転じ、世界の玩具輸出に占めるドイツの割合は64%に後退している(1928年)。ドイツ玩具産業は19世紀末以降急激な発展を遂げ、第一次大戦前に世界市場で支配的地位を獲得、その競争力は頂点に達したといえることができる。

¹⁷ 第一次大戦前は主にドイツから玩具を輸入していたアメリカなどの玩具輸入国では、大戦を契機に国内で玩具産業の急速な発展がみられ、輸入代替がすすんだ。それに伴い、戦後ドイツ玩具産業は世界市場からの部分的な後退を余儀なくされる。(第1表)は、そうした戦後の競争状況を反映したものであり、戦前のドイツの輸出先市場占有率は戦後以上に高いものであった。

(第1表) 主要玩具輸出国の輸出先別市場占有率* (1927年)

輸入国	輸入総額 (1,000RM)	主要輸出国						
		ドイツ	フランス	チェコスロバキア	日本	アメリカ	イギリス	その他
イギリス	55,011	80.1%	4.8%	1.1%	6.4%	4.7%		2.9%
アメリカ	19,783	75.5%	5.3%	3.8%	7.3%		3.5%	4.6%
アルゼンチン	10,088	70.7%	3.8%	—	7.1%	9.9%	4.8%	3.7%
カナダ	8,919	40.5%	1.8%	—	4.2%	39.6%	11.3%	2.6%
オランダ	8,178	85.5%	2.4%	0.7%	2.0%	0.2%	5.0%	4.2%
オーストラリア	6,500	42.4%	1.0%	0.8%	11.6%	8.5%	34.3%	1.4%
インド	5,822	36.6%	1.1%	0.3%	35.0%	7.2%	16.9%	2.9%
スイス	3,365	80.8%	6.7%	0.4%	0.1%	0.3%	8.1%	3.6%
南アフリカ	3,252	46.1%	2.2%	1.2%	7.6%	5.8%	34.6%	2.5%
ベルギー	3,145	47.3%	38.3%	—	—	—	8.6%	5.8%
オーストリア	3,036	80.9%	2.4%	5.2%	0.3%	0.6%	6.2%	4.4%
中国	2,917	11.0%	0.9%	—	51.8%	12.0%	13.8%	10.5%
ドイツ	2,894		8.4%	14.7%	15.0%	2.4%	9.4%	50.1%

* 市場占有率は、輸入総額に占める各国輸出額の比率を指す。

(出展) Ausschuß zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 178-179.

(第2表) 世界の玩具生産

玩具生産国	玩具生産額 (100万M.)	
アメリカ	1914年	57
ドイツ	1913年	ca. 135
フランス	1911年	ca. 40
日本	1914年	6~7
イギリス	1912年	6
イタリア	1911年	1
ロシア	1911年	7
その他	1911年	ca. 10
世界生産	ca. 250	

(出展) Ausschuß zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 173, より作成。

ドイツ玩具産業の成立と発展は、玩具生産の母国という初期条件に支えられながらも、直接にはこうした世界的な玩具需要の拡大に即応した結果であった。後に世界的な鉄道模型製造会社となる「メルクリン社」(Märklin, 創業1859年)、ブリキ玩具で第一次大戦前に世界最大の玩具製造会社となった「ビング兄弟社」(Gebrüder Bing, 同1866年)、蒸気機関車模型や幻灯機で世界的に著名な「エルンスト・プランク社」(Ernst Plank, 同1880年)、そしてテディ・ベアで知られる、ぬいぐるみの「マーガレット・シュタイフ社」(Margarete Steiff, 同1880年)などもこの時期に誕生し、輸出により急速に経営発展を遂げている。

2. エルツ山地木製玩具産業の発展

(1) ドイツ玩具産業の発展傾向

以上のようにして成立したドイツ玩具産業の発展にはどのような特徴がみられたのであろうか。第一次大戦前のドイツ玩具産業の動態と特徴をドイツ帝国統計により確認しておこう。

(第3表)は、ドイツ玩具産業の経営・就業者数の規模別分布とその推移を示したものである。ドイツ帝国統計局による営業調査は、第一次大戦前には1875年、1882年、1895年、1907年の4回行われ、戦後は1925年に第5回の調査が実施されている。1875年、1882年の調査では、玩具産業は他の産業・業種から区別された独立の産業として分類されていない。両営業統計では、工場制工業が素材生産部門に集中していた現実を反映してか、素材別に産業分類をする傾向が強く、製品を基準にした分類は十分になされていない。木製玩具経営は「ろくろ細工」および「彫物品製造」(Schnitzwarenverfertigung)に、金属玩具経営は金属産業にそれぞれ一括されてしまっている。玩具産業が独立した産業部門として扱われるようになるのは、1895年の営業調査以降のことであり、このこと自体が玩具産業の成立と発展を象徴し、また玩具産業が社会的に認知されたことを示している。

そうした(第3表)からは、第一次大戦とその間の輸出途絶ないしは不振にもかかわらず、玩具産業は当該期に全体として経営数で1.9倍、就業者数では2.6倍の伸びを示しており、19世紀末以降急激な発展を遂げたことが確認できる。またこの過程で、とりわけ大経営が就業者数を増やしており、就業者全体に占める大経営の比率は23.4%から40.4%に高まっている。しかし、絶対数でみると、小経営も中経営もともに経営数、就業者数を増やしており、玩具産業の急激な発展のなかに工場制工業化の傾向のみを見て取ることはできない。むしろ1経営あたりの就業者数は1925年でも5.0人にとどまっており、これを他の主要玩具生産国と比較してみると、アメリカは40.7人(就業者数/経営、1923年)、イギリスは53.7人(同、1924年)であり、ドイツにおける産業集中の度合は極めて低いといえる¹⁸。中小経営は活発な新規参入にも支えられドイツ玩具産業の重要な担い手であった。

(第3表) ドイツ玩具産業の経営・就業者数分布

年	小経営 (0～5人)*		中経営 (6～50人)*		大経営 (51人以上)*		合計		就業者 /経営
	経営	就業者	経営	就業者	経営	就業者	経営	就業者	
1895年	5,406	9,610	479	6,743	54	4,986	5,939	21,339	3.6
	91.1%	45.0%	8.0%	31.6%	0.9%	23.4%	100.0%	100.0%	
1907年**	5,551	10,234	622	9,267	92	10,741	6,265	30,242	4.8
	88.6%	33.8%	9.9%	30.6%	1.5%	35.5%	100.0%	99.9%	
1925年***	9,858	17,771	985	15,024	176	22,254	11,019	55,049	5.0
	89.5%	32.3%	8.9%	27.3%	1.6%	40.4%	100.0%	100.0%	

* 被用者数

** 経営数、就業者数ともに副業経営を含まない。また小経営は単独経営を含む。

*** 小経営の経営数、就業者数は単独経営を含む。

(出展) Statistik des Deutschen Reichs, Bd. 113; Bd. 213. Ab. I S. 44-57; Bd. 413. S. 322-327; Bd. 470. H. 4, S. 20-23.

¹⁸ Ausschuß zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 285; Brown, K., *The British Toy Business A History since 1700*, The Hambledon Press, 1996, p. 116.

ドイツ玩具産業の発展過程でみられた以上の2つの傾向に注目し、それらがどのような内実を備えていたかを明らかにするため、次にエルツ山地の木製玩具産業の発展とその特徴を検討しよう。

ドイツ玩具に使用される最も一般的な素材は18世紀までは木材であったが、19世紀には木材資源の不足とそれによる価格高騰のため使用素材の転換がすすみ、玩具の主要素材は金属、木材、張子の3種となった。(第4表)が示すように、ニュルンベルク、マイニンゲン・オーバーラント、エルツ山地の各産地はそれぞれ特定の素材に特化し、ニュルンベルクは金属玩具、マイニンゲン・オーバーラントは張子玩具と木製玩具、そしてエルツ山地は木製玩具の生産を中心に発展した。このうち家内工業を基礎にした生産を維持し、マイニンゲン・オーバーラントとともに労働集約的な産業発展を示したのがエルツ山地である。

(2) 家内工業に基礎づけられた玩具産業の発展

エルツ山地では、12世紀より銀、錫、鉛、コバルトなど各種鉱物資源の開発がすすめられ、同地の鉱山業は15、16世紀に最盛期を迎える。豊富な木材資源を使った木工品の生産は鉱夫の冬の副業として17世紀に始まったとされるが、その後衰退する鉱山業にかわり鉱夫らに新たな就業機会を提供したのが木製玩具の生産であり、18世紀末からはニュルンベルク商人の関与のもと急速に発展する¹⁹。

(第5表)は、ドレスデン、ケムニッツ (Chemnitz) の両商業会議所がエルツ山地の木製玩具産業を対象に実施した家内工業調査 (1868年) の結果である。この調査には玩具以外の木工品の生産に携わる生産者も含まれていると思われ、玩具産業の規模が実態以上に大きく現れている可能性は否定できない。しかし、ドイツ帝国統計の営業調査では家内工業やこれに従事する家族構成員を十分に捕捉できておらず、また1882年の調査までは玩具産業という独自の産業分類すら存在していなかったことに鑑みれば、(第5表)はエルツ山地の生産者像を示す貴重な調査結果といえる。差し当たり3点に注目し、エルツ山地の玩具産業の特徴を指摘しておきたい。

第1に、エルツ山地の玩具産業は家内工業経営を主な担い手とし、ハイデルベルク (Heidelberg)、ザイフェン、グリューンハイニヘンなどの生産中心地が存在する一方、産地内の各集落でひろくに営まれていた。平均的経営像としては、夫と妻、成人の息子が娘が1人、それ

(第4表) ドイツ玩具産業の地域構成 (1907年) *

産地	木製玩具産業		金属玩具産業		張子玩具産業	
	経営数	就業者数	経営数	就業者数	経営数	就業者数
エルツ山地	1,165	3,656	31	376	23	55
	48.8%	42.9%	4.4%	4.5%	1.3%	0.8%
テューリンゲン (マイニンゲン・オーバーラント)	935	3,152	86	376	1,718	6,006
	39.2%	36.8%	12.2%	4.5%	95.3%	90.7%
中部フランケン (ニュルンベルク)	87	567	476	5,623	3	8
	3.7%	6.6%	67.5%	66.7%	0.2%	0.1%

* 百分率は、素材別にみた玩具産業に占める各産地の比率。

(出展) Reible, K., *Die deutsche Spielwarenindustrie, ihre Entwicklung und ihr Gegenwärtiger Stand*, Gießen, 1925, S.78.

¹⁹ Westenberger, a. a. O., S. 22-27; Bachmann, M., *Holzspielzeug aus dem Erzgebirge*, Dresden, 1994, S. 15-28.

(第5表) エルツ産地の家内工業経営 (1868年)

集落	住民数	就業者	世帯数	労働力構成				職種別内訳				仕分け・ 梱包業者	玩具商人	共同旋盤 施設	旋盤場		
				夫	妻	子ども (成人)	子ども	家事手伝い	使用人 見習い*	木彫工	ろくろ細 工工					塗装工	
Deutsch-Einstedel	781	374	78	74	78	66	152	4	-	185	20	107	48	-	2	3	18
Deutsch-Neudorf	1,154	484	117	110	113	89	166	6	-	93	113	64	54	-	2	8	52
Dittersbach	306	104	26	26	26	20	32	-	-	10	21	9	3	-	-	2	42
Frauenbach	591	150	30	25	157	7	8	2	-	50	6	30	20	-	-	-	-
Hallbach	899	62	12	12	12	21	69	4	6	64	10	23	9	-	-	1	12
Heidersdorf	1,945	336	336	296	312	286	524	-	27	32	7	27	9	2	-	1	12
Heidelberg	1,337	391	95	95	92	63	132	6	-	659	171	206	324	8	8	4	36
Neuhausen	485	46	10	10	10	7	18	1	-	167	63	87	107	-	-	-	-
Neuwernsdorf	574	306	62	56	56	54	123	-	17	8	5	2	1	-	-	1	6
Oberseiffenbach	553	164	39	36	36	20	67	2	-	123	37	63	17	2	2	3	32
Niederseiffenbach	851	30	6	6	6	2	13	-	17	60	28	44	15	-	1	2	20
Plaffroda	1,438	937	221	209	216	184	304	6	-	5	4	3	2	2	2	1	10
Reukersdorf	1,639	16	4	4	7	4	16	-	3	16	-	6	-	-	-	-	-
Sayda	1,438	937	221	209	216	184	304	6	-	84	139	150	255	20	8	8	170
Seiffen	12,850	4,648	1,050	973	1,000	825	1,688	58	-	1,766	624	821	864	36	24	34	410
アンシュング	926	139	26	26	25	17	68	-	3	14	-	20	-	-	-	-	-
Blumenau	499	29	5	4	5	6	13	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-
Borsendorf	1,272	316	52	43	39	27	126	18	63	-	6	1	-	-	5	-	-
Börnichen	827	475	84	84	80	100	186	-	25	-	3	-	1	2	7	-	-
Eppendorf	1,860	44	8	6	6	7	24	-	1	-	4	15	13	-	-	-	-
Grünhainichen	1,762	1,541	328	307	319	177	630	54	-	118	13	70	23	76	31	-	-
Hirschberg	103	35	6	6	5	7	15	2	-	2	5	6	-	-	-	-	-
Kleinneuschönberg	544	40	8	8	7	7	18	-	-	2	-	4	-	-	-	-	-
Kühnhaide	1,271	171	33	33	33	36	62	-	7	-	-	24	-	-	-	-	-
Lauterbach	1,380	70	10	10	10	4	32	3	11	2	-	-	-	-	-	-	-
Lengfeld	3,293	31	8	8	8	1	12	-	2	5	3	3	-	3	1	-	-
Marienber	5,518	142	25	25	24	10	74	1	8	-	1	6	5	1	3	-	-
Mittelsaida	874	12	3	3	3	-	6	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Niederneuschönberg	510	32	7	7	7	1	17	-	-	7	-	5	2	-	1	-	-
Oberneuschönberg	625	140	32	32	32	16	41	9	10	32	3	5	1	-	1	-	-
Olbernhau	3,257	380	74	74	64	200	200	-	42	-	34	-	-	28	8	-	-
Pobershau	1,426	265	66	66	66	40	85	-	8	-	38	35	-	-	-	-	-
Pockau	1,048	255	53	51	53	150	150	-	-	-	-	-	-	67	4	-	-
Rittersberg	312	20	4	4	4	5	7	-	-	6	-	2	-	-	-	-	-
Rothenthal	737	355	70	65	70	60	160	-	-	-	110	96	20	-	-	-	-
Rübenau	1,556	233	45	44	45	129	129	15	-	-	-	14	-	-	-	-	-
Sorgau	460	33	7	7	7	4	10	2	3	12	-	5	-	-	-	-	-
Waldkirchen	915	175	30	30	30	25	60	-	30	15	4	10	5	10	3	-	-
Wünschendorf	217	39	38	37	37	117	117	1	24	8	4	18	-	-	1	-	-
Zobitz	1,824	123	26	26	22	9	53	4	9	28	2	18	-	11	1	-	-
ケムニッツ郡農業法蘭西管区	33,567	5,273	1,049	1,007	1,001	559	1,699	111	300	279	232	357	73	198	66	-	-

* 見習いの原語はGehilfeであり、営業法上の厳密な意味での徒弟・職人ではない。

** 木彫工、ろくろ細工のうち14歳未満の子ども。

(出展) Westenberger, a. O., S. 36-37, より作成。

に児童1人ないしは2人からなる家族経営であり、調査時点で他人労働力の使用は稀であった。またグリーンハイニヘンなどの都市を除けば、家内工業家族の多くは山村に暮らし、僅かな土地を所有（保有）しジャガイモなど自家消費用の農作物を生産するか山羊や鶏など小型家畜を飼育し、玩具産業に固有の季節による繁閑の差を乗り切り生存を可能ならしめていた²⁰。そのため経済的独立の基盤を有する自営業者との自己意識は強く、徒弟を受け入れる場合など、経営主は手工業者に準じ「親方」と呼ばれた。

第2に、職種をみると、木彫工の他に集落によっては多数のろくろ細工工が活動している点が注目される。木彫りとろくろ細工はともに木材を切削する技法であり、前者は彫刻刀や鑿などを用いて木を削り出すきわめて労働集約的な方法であるのに対し、後者は水力を用いてろくろを動かし、製品の質的な差異や加工精度をひとまずおけば、木彫に対して物的生産性が高いという特徴をもつ。鉱山業時代の碎鉱場の水力をろくろ用の動力として利用するようになったのがこの地の水力ろくろのはじまりとされ、水力豊富なザイフェンなどでは、特に木彫工に対するろくろ細工工の比率が高くなっている。

（第5表）には、共同旋盤施設（Drehewerk）や旋盤場（Drehstelle）の項目があるが、これらはろくろ細工工が利用した共同の旋盤施設を指す。すなわち、玩具生産が拡大し、ろくろ細工工の自宅兼作業場に水力を引き込むことができなくなると、水力を備えた共同旋盤施設が登場し、1860年代以降普及する。これは施設所有者が自ら労働者を雇用してろくろ細工を行う作業場であるとともに、施設内の旋盤場の大部分はろくろ細工工に賃貸され、家内工業経営の新たな作業場となった。水力ろくろの普及により、木彫工は完成品生産者として、ろくろ細工工は仕上以前の加工を担当する半製品の生産者として、分業関係を形成するようになった。

水力ろくろの普及の他にも、ザイフェンでは「ライフェンドレーエン」（Reifendrehen）と呼ばれる独自のろくろ加工技術が1800年頃に登場した。ライフェンドレーエンとは、直径12～45cmの丸太を輪切りにした木輪（高さ6cm～20cm）の断面にバイトをあて、玩具のモチーフとなる動物などの輪郭を削り出す技法のことである。これによってできたドーナツ状の輪を縦に30～60等分すると、1度の生産で分割した分だけの玩具ができあがる。熟練したろくろ細工工の場合、1日に35～75回木輪の削り出しができたといわれる。これは同様の製品をつくる木彫工8～10家族分の生産量に相当するとされ、両者の生産性格差は歴然としていた。ただし、ろくろ細工工の意図したとおりにモチーフの輪郭を削り出すことができているかどうかは切削後に木輪を切断してみないと確認できないため、ライフェンドレーエンには長年の経験にもとづく高度な熟練が必要とされていた²¹。こうして生産される馬、ラクダ、牛、豚、象などの動物やバッタ、てんとう虫などの昆虫のミニチュアは300種類にもものぼるといわれ、ノアの箱船（Arche Noah）などの箱詰玩具に収納され、とりわけイギリスやアメリカむけに大量に輸出された²²。

最後に、かなりの数の在地商人や玩具の集荷・梱包・発送を行う物流業者が、エルツ山地の中

²⁰ Westenberger, a. a. O., S. 118.

²¹ Bachmann, M., “Zur Geschichte der Seiffener Volkskunst,” *Abhandlungen und Berichte des Staatlichen Museums für Völkerkunde Dresden*, Nr. 28, 1968, S. 179-183; Westenberger, a. a. O., S. 54-57 u. 75-79.

²² ノアの箱船は、聖書の読み聞かせと結びついて18世紀のヨーロッパで流行し、特に宗教的戒律の厳しいプロテスタントの家庭で日曜日にも遊べる玩具として受け入れられた。そのためエルツ山地のノアの箱船はイギリスやアメリカにも多数輸出されることとなった。古川裕朗・古川順子「ザクセン・エルツ山地の人形玩具産業（1）－“おもちゃの村”ザイフェンにおける産業の来歴と今－」『修道商学』第50巻2号、2010年2月；Bachmann (1968), a. a. O., S. 183-190.

央に位置するグリーンハイニヘンなどの集散地で活動していた点が注目される。これらの商人は、これまで問屋制商人（Verleger）と理解されてきたが²³、彼らは基本的に前貸業務を行っておらず、原材料となる木材や塗料、半製品・装飾部品、工具は家内工業経営が自らの責任で調達していた。それゆえ部品を生産する家内労働者とも家内工業経営は商人を介することなく直接取引をした。また製品を企画するのも家内工業経営であり、商人は家内工業経営の作業場を巡回し、生産者が考案した玩具のなかから販売が見込まれる有力な商品を選びだし見本帳を作成した。そして商人はこの見本帳をもとに営業活動を行い、ニュルンベルク商人や外国人輸入商から注文が入った後、家内工業経営に発注した。

エルツ山地在住の商人は、産地内で玩具を買い集め（買入制）、大集散地であるニュルンベルクの卸売商などに販売する仲買商であり、前貸や資金融通などを通じて産地内の生産を組織するという役割を果たしてはいなかった。商人1人あたりの家内工業世帯数も平均すると23世帯にとどまり、零細な仲買商も存在したと推測される。こうした実態を反映して、家内工業経営は特定の商人と専属的な取引関係を結ぶことはなく、複数の商人と取引するのが通例であった。

ただし、家内工業経営は生産および製品企画の面で商人から自立した存在であったとはいえ、商人は玩具産業に特有の需要変動に対応することで、家内工業経営に対して優位に取引を行うことができた。すなわち、玩具には世相を反映した話題の出来事や人物など様々なモチーフが用いられ、素材、品質、用途（遊び方）も多様であることから、製品種類が際だって多いという特徴がある。また遊び道具という製品の特性上、玩具には常に新奇さが求められ、玩具市場には毎年多数の新製品が登場し、流行の変化が著しいという特徴も備えていた。それゆえ、多種多様な製品を取り扱い有望な新製品を数多くもつことは、販売政策上重要な課題であり、それは特定の製品の生産に特化する家内工業経営ではなく、多数の生産者と取引する仲買商によってはじめて可能となることであった。

また商人が家内工業経営との取引を優位にすすめるうえで決定的であったのは、在庫むけの生産である。ヨーロッパやアメリカなどキリスト教圏では玩具の需要期はクリスマス前の1か月間に集中し、逆にクリスマスから復活祭までの期間はこれらの地域から注文が入ることはほとんどない。この間、資力ある商人は次の需要期に備えて定番品や半製品の在庫を増やし、閑散期に仕事を求める家内工業経営との取引を優位にすすめた²⁴。

3. 国際競争のなかのエルツ山地玩具産業

(1) 工場制の進展と家内工業・小経営の存続

以上から明らかなように、エルツ山地における木製玩具産業の発展は基本的に家内工業経営の

²³ 問屋制度をめぐる、ビューチャーら同時代人は前貸業務を伴う場合とそうでない場合（買入制）を峻別し、商人と家内工業経営との関係を論じている。しかし、その場合の前貸業務とはもっぱら直接生産者の搾取手段ととらえられ、前貸業務を通じて生産を組織するという商人の役割や買入制における家内工業経営の生産上の自立性の問題には十分な関心が払われてこなかったといえる。例えば、Bilz, H., *Die gesellschaftliche Stellung und soziale Lage der hausindustriellen Seiffener Spielzeugmacher im 19. und Anfang des 20. Jahrhunderts*, Seiffen, 1975, S. 20-24.

²⁴ Westenberger, a. a. O., S. 90-98. なお、仲買商は家内工業経営が生産した玩具の集荷・販売業務の他に、一部ではあるがノアの箱船やマッチボックス（Zündholzschachtel）といったセット玩具の企画・販売も行っていた。セット玩具に収納する各種のミニチュア玩具の生産は家内工業経営に委託され、その限りでは製造問屋の性格も備えていたといえるが、その場合も原材料の前貸などが行われることはなかった。

増加によって実現したものであり、水力ろくろの普及やライフエンドレーエンという独自技術の発達による既存の家内工業の枠内での生産性上昇に支えられたものであった。しかし、1870年にドイチュカサリーネンベルク（Deutschkatharinenberg）に玩具工場が誕生したのを機に、有力な家内工業経営のなかから工場経営が分出するようになり、以後工場制工業はエルツ山地玩具産業の発展を支えるいま一つの担い手となった。

この地の工場経営の特徴の一つは、特定の製品・技術分野に特化し、高質品を生産するという点にあった。産地在住の仲買商は複数の家内工業経営から玩具を買い集めることでニュルンベルクの卸売商や外国人輸入商に対し多様な製品を提供したのに対し、工場経営は筆箱、積木箱、各種のミニチュア・セット玩具（木製の鉄道、車、建物、田園風景、家庭用品、台所用品）などの分野に特化し、社名を冠した銘柄品をつくることで、仲買商が提供するよりも良質で高価な玩具を生産した。

ただし、高質品生産は機械化の帰結というよりも、工場経営による一連の生産工程の管理や手工的技能労働者により担保されたものであった。第一次大戦前の工場制工業では、一般に木材の裁断、切削、研磨、接着については機械化が実現していたが、その後の工程では手工的技術に依拠し木彫工が半製品の仕上げを、指物工が金属部品の取付けと組立を、そして画工、塗装工が絵付けと彩色を行っていた。機械化が実現していない工程では熟練労働者が必要とされ、単純作業については工場による一元的管理のもと工場外業部の家内労働者が積極的に活用された²⁵。

（第6表）は、エルツ山地における経営規模別の経営・就業者分布とその推移を示したものである。就業者数については、（第5表）と同表との齟齬は明らかであり、その主因は1895年の帝国営業調査では家内工業が十分に捕捉されておらず、実際よりも過小の値となっている点に求められる。この問題に留意しつつ、ひとまず1895-1907年の変化に注目すると、この間の工場制工業化の進展を反映し、就業者全体に占める大経営の割合が14%から24%に上昇していることが確認できる。ただし、大経営が19世紀末以降の玩具産業の発展に果たした役割は重要であるとしても、就業者のなかに工場経営の外業部として機能した家内労働者も含まれていたことを考慮しなければならない。1経営あたりの就業者数の増加は、工場制工業の発展を意味するだけでなく、セット玩具を構成する部品の生産や生産過程のごく一部を担当する家内労働者を積極的に活用した結果でもあった。

（第6表）エルツ山地玩具経営・就業者の規模別分布

年	小経営		中経営		大経営		合計	
	経営*	就業者	経営	就業者	経営	就業者	経営	就業者
1895年	1,040(607)	1,124	59	775	4	312	1,103	2,211
1907年	1,658(489)	2,207	147	1,921	16	1,303	1,821	5,431

* 小経営の経営数括弧内は単独経営。
 (出展) Westenberger, a. a. O., S. 41.

この点をいま少し検討するため、（第7表）により家内工業の動向（1907年）をみてみよう。ここで注目されるのは、1907年の調査時点で全家内工業経営のうち、実に3割近くが既に副業経営であったという点である。また主業家内工業経営の就業者のうち6割は女性であり、それは家族労働力として妻や娘が経営を支えていただけでなく、妻自身が経営主として家内工業に従事し

²⁵ Ebenda, S. 61-65.

(第7表) エルツ山地の家内工業経営・就業者数 (1907年)

地域	家内工業経営			主業経営			男女別 (主業) 家内工業従事者					
	主業 経営	副業 経営	合計	単独 経営	被用者 3人以下	被用者 4人以上	男性	女性	合計	うち家族労働力		
										男性	女性	16歳未満
フライベルク (Freiberg)	398	93	491	118	245	35	328	471	799	24	271	55
フレーア (Flöha)	101	102	203	67	31	3	80	70	150	5	21	9
マリーエンベルク (Marienberg)	92	41	133	65	27	0	57	63	120	1	15	7
合計	591	236	827	250	303	38	465	604	1069	30	307	71

(出展) Westenberger, a. a. O., S. 40 u. 44.

ていたことの結果であった。玩具産業における工場制工業化の進展は家内労働者の広範な活用を伴い、工場周辺に賃加工を請け負う膨大な女性家内労働者をうみだした。その重要な給源が零落した家内工業経営であり、家族労働力のうち妻のみが工場から賃加工を請け負い、家内労働者へと転化していった。副業経営や女性労働力の比率の高さは、家内労働者化しつつある零落家内工業の現実を映し出したものとみることができる²⁶。

とはいえ、ふたたび(第6表)に注目すると、小経営では単独経営が減少しているにもかかわらず、経営数は増加しており、就業者数もお全体の40%を占めている。(第3表)で確認したドイツ玩具産業の小経営拡大傾向がエルツ山地において一層明瞭にあらわれているといえる。1895年営業調査の不備を考慮して、1907年の小経営数から家内工業経営数を減じたうえで1895-1907年の小経営の推移をみると、経営数は200ほど減少したことになる。しかし、経営数減少の半分以上は単独経営の減少によるものであり、そこで両年とも小経営から単独経営を除外し、さらに1907年については、副業経営を単独経営とみなし主業・非単独の家内工業経営を差し引くと、経営数は433から828に増加する。同様に、就業者数についても、両年とも単独経営数を減じたうえで、1907年は主業・非単独の家内工業経営就業者数を差し引いて比較すると、517人から899人に増加する。小経営の衰退は単独経営に集中しており、小経営全般が衰退したということは到底できない。

この点にかかわって、(第7表)でいまひとつ確認しておきたいのは、主業家内工業経営のうち家族以外の他人労働力を雇用する経営は最大で6割近くに達していたという点である。その被用者数は、1主業経営当たりの平均就業者数が2.4人にとどまることから決して大きいとはいえないが、1903年に制定されたドイツ児童保護法により児童労働が禁止された影響もあり、家内工業経営でも他人労働力の雇用がすすんでいた。

(2) 労働集約型産業としての玩具産業の発展

さて、1870/80年代年のエルツ山地では、工場制工業の出現が家内工業を中心とする小経営の没落を招くとの危惧がひろがり、家内工業家族の窮乏化に社会政策的関心がむけられてきた。しかし、その後の玩具産業の発展により家内工業の経営状態は改善がすすんだとされる²⁷。

木製玩具産業では、既述のように、工場制工業化がすすんだ後も、手工労働を必要とする製品

²⁶ 女性家内労働者のいまひとつの給源として、女性工場労働者の存在をあげることができる。女性工場労働者のなかには結婚を機に工場を去った後、自宅で家内労働者として工場の賃加工を請け負う者もいた。

分野や生産工程はひろく存在し、小経営には工場経営との競争を回避し、経営発展を実現する可能性が残されていた。さらに、それと並んで重要であったのは、輸出市場の動向である。ドイツ玩具産業にとって第一次大戦前に最大の輸出市場であったアメリカでは、1870年代に玩具産業が興隆し、またその後高率関税が課されたことで、同市場喪失の脅威が語られた。しかし、第一次大戦前にドイツからアメリカへの玩具輸出が減少することはなく、エルツ山地の玩具産業もアメリカ市場で競争力を維持した。それは、エルツ山地をはじめとするドイツの玩具産業が労働集約的かつ技能集約的な産業発展を特徴としていたことに起因すると考えられる。

(第8表)は、イギリス、アメリカ、ドイツ3国の玩具産業の工場労働者賃金を比較したものである。アメリカに対するドイツの賃金水準の低さは歴然としており、イギリスに対しても、工場制化が比較的すすんだニュルンベルクでこそ同国の賃金水準にほぼ並んでいるものの、マイニンゲン・オーバーラントを中心とするテューリンゲンやエルツ山地の賃金水準はイギリスのそれを相当に下回っている。

以上は1928年の調査にもとづくものであるが、同様の賃金格差状況は第一次大戦前にも存在した。1914-1927年にアメリカ玩具産業の労働者賃金は概ね140%の上昇を記録したが、ドイツ玩具産業でも、産地、男女、職種により違いはみられるものの、全体として賃金水準は戦後大きく上昇している。ドイツの相対的低賃金は戦前以来のものであった²⁸。

またイギリス、アメリカでは僅かな役割しか果たしていなかった家内工業経営が、ドイツでは大きな比重を占め、しかもそれが玩具産業内の低賃金部門を構成していた。家内工業経営の稼得収入と工場労働者の賃金を比較した(第9表)からは、多くの場合、夫婦で玩具生産に携わる家内工業経営の収入が、ニュルンベルクの男性工場労働者の賃金に及んでいないことが明らかである。また夫婦ともに工場に勤める労働者家族を想定すると、工場労働者家族と家内工業家族の所

(第8表) 工場労働者の賃金比較 (1928年)

国・地域		時間給 (Rpf.)
アメリカ*		164
イギリス**		104
ドイツ***	(ニュルンベルク)	95~125
	(テューリンゲン)	63~73
	(エルツ山地)	77

* 1927年。週労働時間を52時間とし、週平均賃金を時間給に換算。

** 男性労働者(21歳以上)の協約賃金。週労働時間を48時間とし、時間給に換算。

*** ニュルンベルクは男性専門労働者(26歳以上)の出来高賃金、テューリンゲンは協約賃金、エルツ山地は男性専門労働者(23歳以上)の協約賃金(時間給)を指す。

(出展) Ausschuss zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 129-131, 292, 319, より作成。

²⁷ ビューヒャー門下でエルツ山地の玩具産業を事例に家内工業問題に取り組んだバステンベルガー(Westenberger, B. E.)の他、メイヤー(Meyer, G.)も家内工業の経営状態が1890年代に入り改善し、所得も上昇に転じたとの見方を示している。Westenberger, a. a. O., S., 130 u. 148-149; Meyer, G., *Die Spielwarenindustrie in sächsischen Erzgebirge (Dissertation)*, Leipzig, 1911, S. 25-26.

²⁸ Ausschuss zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 130-131, 293.

(第9表) 家内工業経営の平均稼得収入 (1906年)

地域		週稼得収入・賃金 (M.)
家内工業 経営	ニュルンベルク	15
	テューリンゲン (ゾネベルク)	16
	エルツ山地	13
工場労働者	ニュルンベルクの男性工場労働者*	25
	ニュルンベルクの女性工場労働者**	10~12
	ニュルンベルクの工場徒弟	2~3

* プレス工・機械工・ブリキ工

** 型抜工・はんだづけ工・ラッカー塗装工

(出展) Heiss, C., A. Koppel, *Heimarbeit und Hausindustrie in Deutschland*, Berlin, 1906, S. 26-31, 138-145 u. 152-165; Rosenhaupt, a. a. O., S. 165-166, より作成。

得差は一層明瞭である。家内工業経営は、収入の減少には生活水準の切り下げをもって対処し、事業の継続を優先する傾向にあった。

では、このような家内工業経営の存在と相対的低賃金により労働集約型産業として発展したドイツ玩具産業は、最大の輸出市場であるアメリカ市場において同国玩具産業とどのような競争関係にあったのであろうか。以下、「ドイツ玩具新聞」(*Deutsche Spielwaren Zeitung*)に掲載されたアメリカ玩具産業に関する一連の記事を手掛かりに、ドイツとアメリカ両国玩具産業の特徴と具体的な競争状況を描出しておこう。

ドイツ玩具新聞はニュルンベルクを拠点に活動するドイツ玩具産業の業界誌であり、生産者、商人への有益な製品・技術・市場(特に輸出市場)情報の提供を使命とし、玩具産業がその時々抱える諸課題や関心事に応える論説記事も多数発表している。アメリカ玩具産業がドイツ玩具産業の競争相手として認識されるようになると、同誌には頻繁にアメリカ市場や同国玩具産業に関する情報・論説記事が掲載されるようになる。以下の論説は、そうしたドイツ玩具産業界のアメリカ玩具産業認識をよく示していると思われる。

「アメリカにはドイツのように経験豊かな家内労働者も安価な工場の労働賃金も存在しない。そして原材料については、木材、金属、染料の価格はヨーロッパよりも高い。アメリカは安価な玩具に専念する意志も能力もなく、価格とは少し別の点に玩具[産業発展]の基礎をおかねばならなかった。

アメリカ玩具産業は以下の原則のもと躍進した。①玩具の構想の段階で既に市場と製造上の問題が考慮される。②構想にあわせて、製造の前に相応しい準備がなされる。③機械制生産の可能性が限界まで追及される。④全労働者は専門労働者(Facharbeiter)にならなければならない。⑤商品の洗練化に最大限努め、製品種類は少ないが、そのかわり実質を伴ったモデルを製造する。⑥簡素化のための努力は、複数のモデルに利用可能な標準部品の製造を通じてなされる。⑦調達、製造、組立、梱包、運送が時間的に正確に調和される。⑧全ての製造上の問題は製品の構想段階で考慮され、あらゆる部分的問題は他の全ての部分的問題と調和される。(中略)」

「標準部品の製造は、特別な利点であると考えられる。これにより新作玩具の材料費が節減される。新しい機械や工具は必要なく、彩色あるいは製作・組立における新たな困難を避けることができる。製造の全過程において、標準部品は現行モデルでも新しいモデルでも費用を節減す

る。このことは少ない新モデルを大量に長期にわたり製造するという意図に沿ったものであり、ヘンリー・フォードのシステムと完全に合致している。』²⁹

論説は、アメリカの工場労働者の賃金水準がドイツよりも高く、また技能労働者も不足している現実を所与として、アメリカ玩具産業が資本集約型の大量生産を指向し、急激な発展を遂げたことを指摘している。ここで挙げられている実行労働に対する構想労働の優位（①②⑧）、機械化指向（③）、標準品（粗悪品でない）の生産と製品種類の限定（⑤）、部品標準化（⑥）など大量生産体制の諸原理が現実の玩具産業の発展過程でどこまで厳密に追求されていたかはともかく、論説はアメリカ玩具産業の特徴をドイツ玩具産業との比較という観点から適切にとらえ、正鵠を射た認識を示したといえよう。

（第10表）は、ドイツとアメリカの玩具経営の被用者・動力を比較したものである。被用者1人あたりの動力数は資本集約度を測る一つの指標とみることができるが、アメリカはドイツに対して圧倒的に高い値を示している。またドイツの動力経営（動力を備えた経営）に限って、アメリカと比較した場合でも、結果は同じである。しかも1動力経営あたりの被用者数では、ドイツは35.8人とアメリカの42.9人に大きく近づいているにも拘わらず、動力は8.6にとどまり、アメリカとの差を被用者数ほどには埋められていないのである。このことは、ドイツの場合、大経営であっても資本集約度はアメリカに比べて低いことを意味しており、労働集約度の高いドイツ玩具産業の市場支配に、アメリカ玩具産業は大量生産という圧倒的な資本装備をもって対抗しようとしていたことを物語っている。

それではドイツ玩具産業はアメリカ玩具産業との競争に直面し、自己の競争力をどう評価していたのであろうか。

「アメリカは人形製造に乗り出しており、当然のことながらアメリカ的嗜好にもとづき人形を生産している。品揃えはなおたいしたことはなく、ドイツで人形が製造されるように、こうした製品が多様に生産されるというにはほど遠い状況である。またドイツの工業製品が特徴として持っているような上品さや完璧さを、アメリカの製品が備えているわけでもない。』³⁰

「安価な機械生産を可能にする製品において、競争相手のアメリカはまもなく市場に成功裏に現れることもありうる。良質品において競争相手のアメリカは近いうちに国内市場を征服するということは恐らくないであろう。』³¹

（第10表）ドイツ・アメリカ玩具経営の動力・被用者数

国	経営	被用者	動力（PS）	動力／被用者	動力／経営	被用者／経営
アメリカ*	397	17,020	19,028	1.1	47.9	42.9
ドイツ** （動力経営）	11,151 (1,515)	58,251 (54,183)	13,076 (13,076)	0.2 (0.2)	1.2 (8.6)	5.2 (35.8)

* 1927年 ** 1925年

（出展）Ausschuß zur Untersuchung der Erzeugungs- und Absatzbedingungen der deutschen Wirtschaft, a. a. O., S. 7, 84, 285 u. 291.

²⁹ Deutsche Spielwaren Zeitung, 20. Jg., Juni 1928.

³⁰ Deutsche Spielwaren Zeitung, Nr. 15., 1. August 1910.

³¹ Deutsche Spielwaren Zeitung, Nr. 23., 1. November 1912.

アメリカ玩具産業は機械化が容易な製品分野では製品の標準化と大量生産を武器に国内市場で輸入代替を果たす一方、それ以外の製品分野ではドイツ玩具産業が多様な製品種類と高質品の生産でアメリカ玩具産業に優位に立っていたことを窺わせる評価である。このことをエルツ山地の玩具産業に即していえば、「アメリカ市場でエルツ山地の製品は圧倒的に手工労働を必要とする分野で強みを発揮して」³²おり、アメリカ玩具産業はその賃金水準の高さのために手工労働・技能を多く必要とする製品分野の生産を断念せねばならなかった。

以上の認識が示すように、家内工業経営による低価格の民芸玩具生産は、エルツ山地の玩具産業の重要な特徴であった。当地でつくられる玩具には、キリスト教の信仰やクリスマスなど祭事に関連するものが多く、ノアの箱船の他にも、キリスト降誕人形 (Krippenfiguren)、クリスマスの伝統的装飾品であるクリスマス・ピラミッド (Weihnachtspyramide)、ろうそく立て (Weihnachtsleuchter)、くるみ割り人形 (Nussknacker) などが特産品となっていた。その特徴は、伝統的な玩具・装飾品がこの地の生活文化と結びつき素朴な風合いを強め、かつ廉価に生産されていたという点にあった。例えば、キリスト降誕人形では、信仰と結びついた調度品であるがゆえにヨーロッパ各地で芸術的な作品づくりが競われたが、エルツ山地では廉価品を量産することに重点が置かれ、厩を飾る人形や羊、木々などがろくろ細工により安価に生産されていた³³。

それでは、エルツ山地の玩具産業は労働集約的な製品分野での競争力を、家内工業を中心とする低賃金労働力の存在によってのみ保持することができたのであろうか。そうではない。エルツ山地の他にも木製玩具の有力な生産地域はヨーロッパに多数存在し、エルツ山地よりも賃金水準の低いとされるボヘミアなどにも有力な玩具産業は育っていた。世界市場でのこれら生産地との競争は、19世紀末にはエルツ山地にとっても無視できない問題となっていた。さらにドイツ玩具産業の主要輸出市場であった大陸ヨーロッパ諸国やアメリカで保護関税が相次いで導入され、とりわけ重量関税が採用されたことは、低価格品の輸出を著しく困難にした。そうした競争状況のなかで、エルツ山地の玩具産業が意識的に追求したのは、アメリカのような徹底した機械化により労働生産性を上昇させる資本集約型の発展ではなく、技能養成を通じて高質品生産や新製品・意匠開発の能力向上を目指す産業発展の途であった。そうした方向性は、次の記事にみられるような認識として、エルツ山地のみならずドイツ玩具産業界にひろく共有されていた。

「アメリカ玩具産業の重点は、超近代的な専用機を用いた大量生産品の生産にある。しかし、アメリカ玩具産業の発展には限界も与えられている。それゆえ我々の努力は、卓越したドイツの手工労働を目的意識的に利用し、高すぎない高質品をつくることにむけられねばならない。こうした製品によって我々はアメリカ市場において今後も成功裏に競争することができるであろう。玩具産業で必要とされる原材料や半製品が高率の輸入関税によって高価になればなるほど、そしてまた資本欠乏により我々が高度な新型の専用機を調達する可能性が低くなればなるほど、我々はますますドイツの高度な専門労働を目的意識的に利用することを強いられるのである。」³⁴

エルツ山地の玩具産業は低価格の民芸玩具の生産地として発展し、家内工業経営中心の生産体制がそれを支えた。エルツ山地ではツンフトに組織された手工業者が玩具生産に携わることは

³² Westenberger, a. a. O., S. 114-115.

³³ 古川、前掲論文：Bachmann (1968), a. a. O., S. 175-177 u. 180-181.

³⁴ *Deutsche Spielwaren Zeitung*, Nr. 7., 1. April 1911.

なく、玩具生産はその最初期から営業自由のもとに発展した。そのため徒弟規制は存在せず、見習い期間として木彫工2年、ろくろ細工工3年という慣行は存在したものの、受入人数や訓練内容、食事・住居提供の有無といった点は各家内工業経営の裁量に任されていた。その結果、玩具生産の拡大の過程で十分な職業能力をもたない者が開業し、粗悪品を廉価に販売するという悪弊が問題となった。そうした粗製乱造問題を背景にして、1853年ザイフェンに「ザクセン王立玩具専門学校」が創設された。また1879年には家内工業経営の窮乏という「社会問題」に対処すべく、グリーンハイニヘンにも「ザクセン王立玩具専門学校」(Staatliche Spielzeug-Fachschule Grünhainichen)が設置され、従来の粗製乱造の防止という点にとどまらず、より積極的に技能養成を通じて玩具産業の振興が図られるようになった。そして20世紀に入る頃には、玩具産業を目指す若年者はこれら専門学校に通学することが通例となった。

また家内工業を基礎にしながら玩具の量産に途を開いたライフェンドレーエンには、量産と品質維持の両立を図るため極めて高い技能が求められたが、この職種については、エルツ山地の玩具産業で唯一強制インング化が図られ、1906年以降厳格な規制のもとに徒弟養成が行われるようになった³⁵。

新製品の開発事例としては、教育学者フレーベル (Fröbel, F) の理論を取り入れ教育玩具として流行した積み木箱や小箱に様々なミニチュアを詰め込んだ大衆むけ玩具マッチボックスなどが考案され、特に後者は家内工業経営によって生産され、エルツ山地の特産品として世界中に輸出された³⁶。

小括

エルツ山地の玩具産業は、家内工業経営を主な担い手とする労働集約型産業として発展し、第一次大戦前には世界市場で確たる地位を占めていた。アメリカ玩具産業はドイツ玩具産業の市場支配に対する挑戦者として19世紀末に台頭するが、エルツ山地の玩具産業はそれまでの労働集約型の産業構造を維持しつつ、技能養成の制度化を通じてより質の高い木製玩具の生産を追求し、新たな民芸玩具の開発にも努めた。エルツ山地における家内工業経営存続の背景には、このような国際的競争関係とそれへの対応が存在したのである。

(続く)

³⁵ Westenberger, a. a. O., S. 58-59.

³⁶ Bachmann (1994), a. a. O., S. 106-107, 200 u. 203.